

# 博士論文（要約）

## 意図・行為・理由

——意図と理由の選言説に基づいて、  
行為の反因果説を擁護する

鈴木 雄 大

## 要約

論文題目 意図・行為・理由

——意図と理由の選言説に基づいて、  
行為の反因果説を擁護する

氏名 鈴木雄大

われわれ人間は、石や木のようにただ環境に巻き込まれて受動的に存在するだけでなく、環境に能動的に介入し、それをある程度目的に沿った仕方に変えることができる。このような人間のメルクマールの一つは「行為」と呼ばれ、本論文は「行為とは何か」という哲学的な問いを巡って展開する。「因果説」と呼ばれる、現代行為論において標準的とされる見解に対して、本論文は「反因果説」という対立する選択肢の擁護を試みる。

本論文の第1章では、コップを倒すという行為とお辞儀をするという行為の二種類の行為に着目し、双方に何らかの身体動作が含まれていることを指摘する。行為者は、コップを倒すときにはたとえばコップに触れる仕方です手を動かし、お辞儀をするときには腰を曲げる。ではどんな行為にも含まれていると思われる身体動作、たとえば手を動かすことが行為であるとはどういうことだろうか。この問いは、手を動かすという行為を、手は動いたのだが行為ではないような事例と比べ、両者の相違を明らかにすることで答えられるだろう。手を動かすという行為がなされた場合と、行為ではない仕方です手が動いた場合のどちらにも、手が動くという身体動作が共通に含まれているとするならば、両事例は他のいかなる違いゆえに、一方は行為であり、他方はそうでないのか。これに対する標準的な見解は、行為の場合には、手が動くという身体動作が、手を動かそうと

いう意図を原因として生じたのに対して、行為でない場合には、手が動くという身体動作は手を動かそうという意図を原因として生じていないというものである。このように意図が実現したものとしての行為は、意図的行為と呼ばれる。そして意図的行為を、何らかの意図を原因として生じた身体動作として捉える見解は「因果説」と呼ばれる。

第2章では、第1章で示した因果説の基本的な構図からさらに踏み込んで、意図を原因とすることによってなぜ身体動作は意図的行為となるのか、という点を問題にする。まずそれに対する一答案として、「意志作用説」と呼ばれる伝統的な因果説を検討する。意志作用説は、身体動作が意図を原因とすることで意図的行為となるのは、身体動作の原因である意図それ自身が意図的ないし能動的な性質をもつゆえであると説明する。しかしこのような説明は、意図それ自身が意図的であるのはなぜかというさらなる問題を抱え、意図性の説明を身体動作からその原因へと先送りしているにすぎない。その次に検討されるのは、身体動作が意図的となるのは、身体動作がそれを合理的に説明するもの、すなわち「理由」を原因として生じたからであるとする見解である。その見解は、現代の標準的な因果説の重要な一部をなすものである。行為を合理的に説明する理由は欲求や信念であるとされ、欲求や信念は多くの場合受動的にもたれるものであるゆえに、この標準的な因果説は、意志作用説のようにそれ自身意図的ないし能動的な意図に訴えることなしに、意図的行為を理解しようと試みる。

しかし標準的因果説には「逸脱因果事例」と呼ばれる反例が存在することが知られている。たとえばコップを倒したいという欲求と手を動かせばコップを倒せるという信念が原因で、手が動くという身体動作が生じたとしても、それら欲求と信念が何らかの動揺を引き起こし、その動揺が手の動きを引き起こしたのならば、その手の動きは意図的行為だとは考えられない。つまり手の動きを合理化するような欲求と信念によってその手の動きが引き起こされたとしても、その因果関係の間に動揺のような逸脱的な出来事が介在すれば、手の動きは意図的行為とはならないのである。この逸脱因果事例を排除するための必要十分な条件を特定することはとても難しく、さらにそのことは因果説の根本的な問題を指し示していると私は考える。つまり身体動作を意図的たらしめるものを身体動作の外部にある原因に求めるならば、そこで行為者は自ら体を動かしたのではなく、単に行為者の体が動かされたにすぎなくなってしまうのではないか。こうして私は第3章より、反因果説の可能性を探ることとなる。

第3章では、まず反因果説よりも因果説の方が好ましいとする議論の主要なものである「デイヴィッドソンからの挑戦」に応答した後で、その応答に対する再反論としての「メレからの挑戦」を提示する。メレからの挑戦では、手を上げようという意図が手が上がるという身体動作へと結実した行為の事例と、手を上げようという意図はあったが、手

が上がったのはその意図ゆえでなく別の何らかの原因ゆえであった場合とを比べ、どちらの事例でも意図と身体動作は揃っているが、一方では行為が成立しているのに対して他方ではそうでないのはなぜかと問われる。両事例の間で意図と身体動作は共通していると考えれば、両事例の違いはそうした意図と身体動作の間の因果関係の有無にあると考えざるをえなくなる。メレからの挑戦は因果説を支持する最も強力な議論となっている。しかし私はその議論の前提になっていること、すなわち比較される二つの事例の間で意図と身体動作が共通であるという前提を拒否することで、反因果説に可能性を開くことができると考える。身体動作に関しては本論文では論じることとはしないが、意図に関しては、上の二つの事例における意図が共通のものでないという考えを「意図の選言説」と呼び、次章でその擁護を試みる。

第4章では、「選言説」という考え方は知覚の哲学で生まれたため、まず知覚の哲学における議論を簡単に参照した上で、それとよく似た構造の議論が意図に関しても認められることを指摘する。意図に関して比較される二つの事例は、手を上げようと意図してそれに成功した事例と、手を上げようと意図したが手が麻痺してそれに失敗した事例である。先の因果説の議論によれば両事例における意図は同じものであると考えられるが、意図の選言説はそれに反対し、両事例における意図は異なったものであると主張する。本章では両事例における意図が同一であるとする論拠を退け、そして意図の選言説に支持を与える論拠を提出する。

第4章では身体動作を意図的たらしめるものとして意図に焦点を当てていたが、身体動作を意図的たらしめるものの候補には、他に欲求や信念といった理由がある。よって最終章である第5章では、意図ではなく、欲求・信念と身体動作との間の関係に焦点を当てる。欲求・信念が身体動作を合理的に説明するとき、欲求・信念は身体動作の原因であると因果説は主張するが、そこで因果説は欲求・信念をそれぞれ欲するという心的態度と信じるという心的態度として捉えている。このように行為を合理的に説明する理由を心的態度として捉える考えは「心理主義」と呼ばれる。因果説は心理主義を前提していると考えられるため、私は心理主義に反対し、行為の理由は心的態度ではなくその対象であるとする「反心理主義」を擁護することで、因果説を批判することができると考える。ここでもまた大きく二つの事例が比較され、それは行為に際して行為者の信念が正しい事例と、誤っている事例である。たとえば私が友人の背中に虫がいると思い、背中を叩いたとき、実際に虫がいたのであれば私は背中を叩いた理由を「虫を追い払ったのだ」や「虫がいたからだ」のように対象的なものに訴えることで説明できるが、もし実は虫がいなかったのであれば（虫だと思ったものはホクロだった）、私はそのように対象的なものに訴えた説明を与えることはできず、「虫を追い払おうと思ったからだ」

や「虫がいると思ったからだ」のように心的態度に訴えたように見える仕方で説明しなければならない。われわれは通常、つまり行為者の信念が真であるときには、対象的なものに訴えた説明を与えるように思われる。反心理主義はこの説明を額面通りに受け取り、行為の理由は心的態度ではなく対象的なものであると考える。反心理主義にとっての大きな問題は、心的態度に訴えたように見える説明が与えられる、行為者の信念が誤っている事例をどう理解するかという問題である。私は反心理主義は、「理由の選言説」と呼ばれる立場として理解されることによって、そうした問題に答えられるようになると思う。理由の選言説によれば、理由に関して比較される二つの事例、すなわち行為者の信念が正しい事例と誤っている事例において、それぞれの理由は異なったものであり、そして後者の事例における理由は前者の事例における理由に基づいて理解される。本章では、そのように理由の選言説をとった反心理主義を支持する議論を与え、そして心理主義に支持を与えるとされる議論を紹介した上で、それを退ける。

以上において、意図と身体動作の間の関係も、欲求・信念と身体動作の間の関係も、因果的ではないと考えられる一定の議論が提示された。それらの関係は因果関係ではなくより内在的な関係であると私は考えるが、しかしそれが実質的にどのような関係であるのかという問題は、今後の課題となる。